

# 個体と出来事

— ライプニッツの〈完足的概念〉について —

石 川 満

[キーワード：① 個性と偶然性；② 離散体と連続体；③ 集合と系列；  
④ 主語と主観；⑤ 形相的と卓越的]

ライプニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz) は主に、「形而上学叙説 (Discours de metaphysique, 1686)」及びアルノー (Antoine Arnauld) 宛書簡において、個体の完足的概念 (une notion complete, une notion accomplie) というものについて述べている。各個体の完足的概念は、その個体について真である全てのこと、その全述語 (状態、出来事) を内に含んでいるというのである。そして、このような完足的概念は、神の悟性の内に、いわば永遠に渡って、存立しているとされる。すると「各人の個体概念は、いつかその人に起こることを一度に (une fois) 全て含んでいるので、それを見れば、各々の出来事の真理のアプリオリな証明乃至理由、つまり、なぜ或る出来事 (l'un) が起こって、他の出来事 (l'autre) が起こらなかったのかということがわかる」(G, 2/12, cf. DM. 13) ということになる。それ故、従来、ライプニッツの完足的概念について、それは、出来事の他である可能性を閉ざし、全述語をその個体にとって必然的なものにするものであるとの批判がなされてきたのも理由のあることであっ

た。実際、このような完足概念を基礎にして決定論的モデルを構成することは、さほど難しいことではないだろう。ライプニッツ自身は、主語と述語の関係の内的であることは、それが偶然的事であることと矛盾せず、両立可能であると考えていたが、一般には、それが内的であることは、同時に、それが分析的で、本質的で、必然的事であることだとする方が自然な推論であると思われたのである。

このような見解の対立を議論の前提として、以下、本論では、ライプニッツの哲学において、個体とそれに起こる出来事との関係が、いかなるものであったのかを検討したい。そこで、まず、従来、いかなる意味で、ライプニッツ哲学において個体と出来事との関係が必然的事であるとされてきたのかを見るために完足概念を基礎に構成され得る決定論的モデルから出発したいと思う。

## 1. 決定論的モデル

個体の完足概念から、決定論的モデルを構成するにあたって、まず最初に、個体の完足概念には、相互に内的連関を持ってはいるが区別して考察すべき二側面のあることに留意したい。一方では、完足概念は、命題における真理とは、その命題の述語が主語に内在することであるという、ライプニッツの真理説の一帰結としての性格を持ち、他方では、それは、個体概念として、個体的実体の個性及び同一性の原理として要請されたという側面を持つ。以下、前者の概念の領域、論理的側面を内在説の問題、後者の実体の領域、形而上学的側面を個性の問題と呼ぶこととしよう。

(a) 内在説の問題

ライプニッツに従うならば、「あらゆる肯定的な、真なる命題においては、その命題が、必然的でも偶然的でも、普遍的でも単一的でも、述語の概念は、常に、或る何らかの仕方でも (en quelque façon)、主語の概念の内に含まれている。述語は、主語に内在する (praedicatum inest subjecto)。さもなければ真理とは何であるのか私にはわからない」(G. 2/56)。従って、この、述語の主語への内在は、主語と述語の間の最も一般的な関係なのであって、この関係以外になにか外在的關係といったようなものがあるわけではない。ライプニッツにとって、必然的命題と偶然的命題の差異は、主語と述語の關係が内在的か外在的かの差異ではないのである(註1)。そこで、個体を主語とした偶然的命題にあっても、その命題の述語は主語に内在していることとなる。「というのも、その述語も内に含まれるように、即ち、述語が主語に内在することができるように (ut possit inesse subjecto) 全てを含むのが、このような完全な主語の本性であると我々は仮定しているのであるから」(DM. 13)。三角形の概念の内に、三角形について言い得る全てのことが含まれているように、カエサルの概念の内には、カエサルに起こる全ての出来事が含まれているのであって、この仮定は、ライプニッツの真理説 (praedicatum inest subjecto) からの避けがたい帰結である (cf. *ibid.*)。

さらに、その、述語の主語への内在の仕方について、ライプニッツは、次のように論じている。即ち、或る命題において、その述語が主語に内在するとは、その命題が、アプリアリな証明を持っているということであり (cf. DM. 13, G2/12, 62, 438, G.7/43, 44, 295, Grua. 287)、その命題が、アプリアリに証明可能であるとは、概念の分析によって、その命題が同一命題へと還元可能であるということ (cf. G. 7/44, 295, 300) であ

る。そして、偶然的命題のアプリオリな証明可能性、同一命題への還元可能性は、その命題の主語と述語の結合の理由が「これらの名辞の概念の内  
に存している」(G. 2/56, cf. G. 2/46, DM. 13) というそのことに存  
している。個体を主語とした偶然的命題をも含めて、「全ての真理は、そ  
の名辞の概念の内から引き出されてくるアプリオリな証明を持つ」(G. 2/  
62) のである。

偶然的真理の証明は、それが我々に可能であると否とを問わず、原理的  
に、その可能であることが保証されているのであり (cf. *ibid.*)、それ  
は、述語が、既に概念の次元で、創造以前に、神の悟性の中で、即ち「可  
可能性の見地において (sub ratione possibilitatis)」(G. 2/39, 41; 51,  
52)、主語に含まれているということに基づいているのであって、それ故、  
アプリオリに (即ち、現実に言及せずに、経験に先立って) 証明が可能で  
あるといわれるのである。述語が主語に内在するというこの意味におい  
て、ライプニッツにとって、全ての命題は分析的であるといっても誤りで  
はない。

さて、以上のような述語の主語への内在の仕方は、完足概念が諸述語  
の集合という構造を持っているということを示唆しているであろう。つま  
り、主語は述語に内在する (主語と述語の関係が分析的である) とは、述  
語が集合の要素として、集合の内に含まれてあるということであり、それ  
故に、個体を主語とした命題も、概念の分析によって証明が可能であると  
言い得るのである。すると、まず第一に与えられるのは、完足概念の原  
子的構成要素としての単純な述語群であり、それら諸述語の共可能的な限  
りでの最大集合が個体の完足概念ということになる。個体の完足概念  
は、原子的述語の離散的集合であり、述語は主語に先立つのである。

(b) 個体性の問題

述語の主語への内在という真理説を離れて、他方で、完足的概念は、或る個体を他の個体から区別する個体性の原理として要請されたという側面をも持つ。この場合、概念が完足的であるとは、その概念が、一つも欠けることなく、最後の細部に到るまで決定されてあるということ、その個体の属する世界の事象の全てを内に含むということに他ならない。というのも、無数の可能的及び現実的個体から或る個体を区別するためには、是非とも無数の述語が必要なのである(註 2)。換言するならば、同じ非完足概念を共有する個体は常に複数おり、それは個体を同定し得ないのである (cf. G. 2/42, 54)。「普遍性を個体へと決定するのは、この完足概念なのである」(G. 2/54)。完足概念は、自と他を区別する個体性の原理であり、実体の個体性は、その概念の完足性に存する。

このように、個体的実体の個体性がその完足概念に存し、従ってまた、個体はその全述語によってこそ同定されるのであれば、どんなささいな一述語の入れ替えも他の個体概念への移行を意味するであろう (cf. G. 2/42, 53)。全述語が全てそろって、或る個体を他ならぬその個体たらしめているのである。その意味で、主語にとって全述語が本質的であると言い得る。

さらに、完足概念は、個体の通時的同一性の原理であるとされる。時間と共に変化していく述語(状態、出来事)の変化を通じての個体の同一性は、「あらゆる述語が…過去のも現在のも未来のも、主語の概念の内に含まれている」(G. 2/40)というそのことに存している。個体概念は、全述語を時制の区別なく、一度に (une fois) 含んでいるのである。換言すれば、個体概念は、「可能的なものの世界、即ち神の悟性の内に」(G. 2/42) あるのであって、そうした仕方で時間系列に従っての変化を越えるこ

とによって、それは、個体のアプリアリな同一性の原理たり得ているのである (cf. G. 2/43)。

(c) 決定論的モデル

完足概念について、内在説の問題と個性性の問題という二側面からその性格を見てきたが、それを手短かにまとめると次のようになろう。まず、内在説の側からは、① アプリアリに証明可能な仕方での述語の主語への内在、② 完足概念の集合的構造、及び主語に対する述語の先行性、他方、個性性の問題の側からは、③ 完足概念の完足性、④ 完足概念の脱時間性、という以上四つの基本的性格を挙げることができよう。

さて、このようなものとして個体の完足概念を認めた上は、これら四つを支柱として、そこから決定論的モデルを構成することは、容易なことと思われる。例えば、ペテロはキリストを否認する、という命題において、キリストを否認するということは、ペテロの個性性の欠くことのできない部分を構成し(②、③)その否認は、既に創造以前に神の悟性において、永遠に渡って真である(①、④)ということを経た上は、ペテロがキリストを否認しないということには、虚偽乃至矛盾が存することになり、もしくは、ペテロの個性概念を破壊することになろう (cf. G. 2/52)。あるいは、また、一方で、個体と出来事の関係が分析的である以上(①、②)、他ならぬその個体の出来事が他であることは不可能であり、他方で、個体と出来事の関係が本質的である以上(③、④)、他の出来事を持った個体が、同一の個体であることは不可能であろう。従って、「もしペテロがキリストを否認しなかったとしたらどうなっていたであろうと私が問うとき、それは、ペテロがペテロでなかったら、と問うことと同じことになる。というのも、この否認はペテロの個性概念の内に含まれているのであるから」(Grua, 358)<sup>(註 3)</sup>。

このように、四つの支柱は、互いに交差し、それらに基づく二つの問題も相まって一つのディレンマを作ることになる。主語をピン止めし、個体の個性及び同一性から出発すると述語の他である可能性としての偶然性は得られず、偶然性から出発すると個体の個性及び同一性がぼやけてしまうのである。即ち、同定された個体から出発すると、そのものに自由はなく、あれもこれも可能であるという自由から出発すると、それが誰にとつての自由なのかが不定になってしまうのである。ここにみられるような、個体の個性とそれに起こる出来事の偶然性の非両立的関係こそ、決定論的モデルの提示するディレンマに他ならない。個性の問題は、個体の個性を完足的概念に求めることを要求し、内在説の問題は、その完足概念と述語の関係が、必然的であることを要求する。二つの問題は、完足概念において出会い、一つの困難を形成するのである。

そこで以下、本論で扱われるべき課題は、次のようなものとなる。即ち、主語と述語の関係が必然的であり、且つその述語によってこそ主語が同定される時、他ならぬその主語について、述語の他であることはいかにして可能か。

## 2. 無限分析の説

個体の完足概念を破壊せずに、その述語の他であることはいかにして可能かという問いに答えられずにいたライブニッツは、「あらゆることは、絶対的に必然的であるとする人々の見解に自分が非常に近づいているのを発見した」(FC. 178)。この問いへの解答の方途として、ライブニッツに現れた「新しく、予期せぬ光」(FC. 179)こそ偶然的命題の証明に関する無限分析の説であり、それは、「無限の本性に関する数学的考察から」

(ibid.) 得られたのであった。

無限分析の説が、命題の証明乃至概念の分析に関わるものである以上、それは、決定論的モデルの内、内在説の問題に基づくもの（偶然的命題のアプリオリな証明可能性、完足的概念の集会的構造）を標的としたものである。

(a) 無限漸近の説

1686年7月のアルノー宛書簡では、ライプニッツは、先述したように、「全ての真理は、その名辞の概念の内から引き出されてくるアプリオリな証明を持つ」(G. 2/62)との見解を保持していた。必然的命題においても、偶然的命題においても、主語と述語の結合の基礎 (cf. G. 2/57) 乃至真理の理由 (cf. G. 2/46) といわれるものは、名辞の概念の内こそあるのであって、それ故、そのどちらもが等しく概念の分析によって、同一命題へと還元可能なのであった。この時、着目すべきは、まず、真理の証明は、我々にそれが可能であると否とを問わず、原理的に可能なのであり、必ず完了するということ、即ち、それがどれほど長かろうと、必ず有限回の手続きで証明され得るということであり、次に、名辞の結合の基礎乃至真理の理由は、その真理が必然的、偶然的を問わず、同一命題への還元可能性であり、端的にいて同一律であるということである。これらの点については、必然的真理と偶然的真理の間に本質的差異はないのである。

以上の点について、同じく1686年に書かれた「概念と真理の分析についての一般的探求 (Generales Inquisitiones de Analysi Notionum et Veritatum)」(以下、「一般的探求」とする)において、重要な変化が見られる。無限分析の説が、いまだ未完成な姿ではあるが述べられているのである。以下、それを見てみよう。

まず、以前と同様に、「全ての真なる命題は証明される」(GI. 132)と

いうこと、「従って、証明されるもの、即ち、その理由が分析によって与えられるものは真である」(GI. 130)ということが認められねばならない (cf. GI. 62, 66)。この際、証明の方法も以前と同様、概念の分析である。述語が主語に内在している以上、概念の分析によって、一方の内に他方の内にあるものを見出し得るのは当然のことなのである (cf. GI. 132)。従って以前と同様に「真なる必然的命題は、同一命題への還元、乃至は、その対立命題の矛盾命題への還元によって証明され得る」(GI. 133)。しかし、他方、以前と異なり、「真なる偶然的命題は、同一命題に還元されない」(GI. 134)。というのも、例えば「ペテロの概念は完足的で、それ故、無限に多くのものを含んでおり、そのため決して完了した証明に達することができない」(GI, 74) からである。しかし、偶然的命題も、それが真である限り、証明されなくてはならない。そこで、真なる偶然的命題は、「連続的な、さらに増加していく分解によって、確実に同一命題へと接近すること、しかし、決してそれへ到達しないこと」(GI. 134, cf. GI. 66, 74) を示すことによって証明され得るとされる。ここでは、同一命題への無限の漸近ということが、その命題の真であることの徴表であり、しかし、決して同一命題へと還元されないということが、その命題の偶然的であることの徴表なのである (cf. GI. 56, 61, 66, 74, 130)。「従って、必然的真理と偶然的真理との差異は、交わる直線と漸近曲線の差異、乃至は、通約可能数と通約不可能数との差異に等しい」(GI. 135, cf. GI. 136)。

従って、「一般的探求」に見られる変化とは、偶然的真理の分析が無限の手続きを必要とし、原理的に完了しないということを認めたという一点に存する。必然的真理とは有限回の手続きで証明可能なものであり、偶然的真理とは無限回の手続きを必要とするが証明可能なものである。結局、

「一般的探求」においては、偶然的真理の真であること（証明可能性）と偶然的であること（同一命題への還元不可能性）という互いに相反する要素を、同一命題への無限漸近による証明を認めることによって媒介したのである。しかし、この時、この説は、無限を媒介として、必然的真理と偶然的真理の差異を程度的、連続的なものとしているのではないかとの疑問が生じてくる。即ち、「我々は、…また、二つの量が互いに等しいということ漸近値において証明し得る」(GI. 136)と言われる時、同一命題に無限に漸近していく命題は、必然的命題に無限に漸近し、もはやそれに等しいのではないかとの疑問が生じてくる。それ故、この説における進歩と困難は、先に、真理の理由乃至名辞の結合の基礎としての同一律が、名辞の内にありそれ故に、その概念分析の過程の内に同一律を見出し得たのと同様に、あるいは、それに対して、この説では、同一律が、概念分析の過程の果てに見い出されているということに存する。

#### (b) 無限分析の説

完成された形での無限分析の説では、以上の困難をふまえた上で、さらなる変化が見られる。まず認められるべきは、全ての真理は証明可能であるということではなく、全ての真理には理由があるということなのである。従って、「偶然的真理、即ち、事実の真理にも十分な理由がなくてはならない。ただ、自然の事物の非常な多様性と物体の無限分割との故に、個々の理由に分解していくと限りなく細部に到ることになる」(Mo. 36)。「ところで、この細部が、いずれも内に、それより以前の、もしくは、より微細な偶然的なものを蔵し、その偶然的なもの一つ一つの理由を示すには、また同様の分析が必要になってくるから、そのようにしてどれだけ行ったとしても一向に前進したことはない」(Mo. 37)。偶然的命題における真理の基礎は、もはや同一律ではなく充足理由であり、真理分析の方

法は、もはや概念の分析ではなく個々の理由の分析である。この理由の分析とは、概念的には、「本性的により後のものから本性的により先のものへの分析」(G. 3/582)であり、これは、存在の領域にあっては、時間的に「より以前の」理由への遡行であり、空間的に「より微細な」理由への分割である。そして、ここにいわれているように、この理由の分析が「理由には、また理由がある」(Grua. 303)という仕方でも無限に到り、従って結局、全く前進など見られないのだとしたら、先に述べられたような、真理の理由（先には同一律、ここでは充足理由）への接近など全く見られないということになろう<sup>(註4)</sup>。それ故、完成された無限分析の説にあっては、偶然的真理の証明とは「矛盾を含んだものであろう」(FC. 184)。偶然的真理は、我々の能力の問題を離れて、原理的に証明不可能なのである。

しかし、偶然的真理は、証明不可能であるにせよ、それが真である限り、それには理由が、充足理由がなくてはならないのであった。ただ、事象の系列は無限に遡行が可能であり、且つ無限に分割が可能であるとする、このような仕方では一向に最後の理由たる充足理由に到達し得ないのであった。「それ故、十分な理由、即ち最後の理由は、これら偶然的なもの細部がいかにも無限であり得るとしても、結局、その連結乃至系列の外に (*hors de la suite ou series*) あるとしなければならない」(Mo. 37, cf. PNG. 8, G. 7/302-303, Grua. 303)。従って、偶然的真理の理由は、個々の理由や事象の、到達可能な系列の内にあるのでもないし、漸近可能な系列の果てにあるのでもない。偶然的命題の主語と述語の結合の理由は、名辞の概念の分析の過程の内にも、その過程の果てにも見出し得ないのである。結局、或る何らかの仕方でも (*en quelque façon*) と言われた述語の主語への内在の仕方、証明可能な仕方と不可能な仕方とがあり、その内在の理由が、それら名辞の概念の内にあるものと外にあるものがある

ことになる。「従って、全てのものが理由を持っている。それ自身によって必然的なものは、自身の内に、及び自身の概念から (*in se et ex terminis*)。自由で偶然的な、いわば非本質的に仮定的に必然的なものは、どこか他のところから (*aliunde*)」(*Grua.* 273)。以上が、無限分析の説によって明らかにされる偶然的真理と必然的真理の「本質的差異」(*G.* 7/309, *FC.* 184) である(註 5)。

さて、以上のように、無限分析の説は、前説で見た決定論的モデルの四つの支柱の内の一つである偶然的命題における証明可能な仕方での述語の主語への内在ということに向けられたものであった。或る述語の主語への内在が本来的に証明不可能であることによって、その述語の他である可能性としての偶然性が初めて開けてくるのである。しかし、無限分析の説の持つ意味は、これにとどまるものではない。決定論的モデルの構造の内的連関の故に、無限分析の説は、確かにより広い批判の射程を持っている。

まず、無限分析の説における分析の二側面、即ち、「より以前の」偶然的なものへの無限遡行と、「より微細な」偶然的なものへの無限分割に再び着目しよう。前者は、諸述語が、決定論的モデルにおけるような単なる集合としてあるのではなく、より前より後という秩序系列をなしているということ、及びその系列が無限の長さを持っているということを教えてくれる。そして後者は、述語(出来事)は、どこまでも分割可能であるということ、即ち、決定論的モデルにおいてまず第一に与えられたそれ以上分割不可能な単純な述語と言うものなど無いのだということを教えてくれる。「偶然的なもの、もしくは存在するものにあっては、本性的により後のものから本性的により先のものへというこの分析は、原始的要素 (*des elements primitifs*) へと還元されることなく、無限に続くのである」(*G.* 3/582)。そうである以上、各述語、各出来事は、集合の要素として正確な

輪郭を持つようなものではなく、各述語間に明確な一線を引くことはできないであろう。つまり、各出来事は連続的であるだろう。従って、個体の完足的概念は、今や、単純な述語の離散的集合ではなく、連続的な述語系列である。無限分析の説は、決定論的モデルの支柱の一つであった完足概念の集合的構造にも転換をせまるものなのである。そして、この集合体から連続体への転換は、同時に、述語の主語に対する先行性の転換をも含意している。と言うのも、ライブニッツに従うならば、集合においては、その部分（各述語概念）は全体（主語概念）に先立ち、全体は、その部分の合成の結果であった。しかし、連続的なものにあつては、諸部分は、常に、さらにいくらかでも分割可能な潜勢的なものにとどまり、一が分数に対するように、全体が部分に本性上先立つのである (cf. G. 2/282, G. 3/622-623, G. 4/491-492)。集合体から連続体への転換は、述語先行型から主語先行型への逆転を意味するのである。そして、このことは、さらに諸述語（諸部分）の合成という仕方では、完足概念は決して完足的になり得ず、決して完成し、成就した形で与えられることはない、ということを示している。換言するならば、まず全体（主語概念）が先行して与えられているこの場合、各部分（各述語概念）の全体への内在は、常に潜勢的な仕方でのしかあり得ないのである。あたかも直線が、点の集合以上のものであるごとく、主語概念は述語の総和以上の何ものかであらねばならず、各述語は、ただ潜勢的な仕方でのみ全体に含まれていなければならない。「連続体は、未決定の部分を含む」(G. 2/282)のである。ここで、このような仕方での偶然性の問題と連続性の問題が会うのは決して偶然ではない。いわゆる「連続の合成という迷宮 (le labyrinthe de compositione continui)」(G. 2/119, 4/491)と人間の自由の問題は「我々の理性がそこでしばしば迷ってしまう二つの名高い迷宮」(G. 6/29)であつて、「そ

れらは二つ共、同じ源から、即ち、無限ということから起こっているのである」(FC. 179 cf. G. 6/29, 64-65)。

さて、以上に述べたことを、ライプニッツがスコラ哲学から受け継いだ用語を用いて次のように言うことができよう。即ち、決定論的モデルにおける主語は、諸述語を形相的に (formaliter) 含み、無限分析の説における主語は、諸述語を卓越的に (eminenter) 含む、と (cf. G, 2/263)。この場合、全体が部分を形相的に含むとは、例えば、羊の群れの如く、部分が本性上全体に先行し、全体と部分の総和とが等しいことを言い、卓越的に含むとは、例えば直線と点の如く、全体が本性上部分に先行し、全体が、部分の総和以上の何ものかであることを言う。決定論的モデルの述語集合型述語先行型の構造を支持しているのは、「形而上学叙説」及びアルノー宛書簡において、主語が述語集合以上の何ものであるのかが明確にされていないという事実である。今、無限分析の説に到って、主語は述語集合以上の何ものかであり、述語に先行するという、そのことは明かとなった。そして、述語の他である可能性としての偶然性を求める際、述語による主語の同定の仕方そのものが批判の対象となるのは、むしろ当然のことであり、必要なことでもある。しかし、それでは、主語がどのような仕方です述語に先行し、また、述語集合以上の何であるのかについては、無限分析の説の枠内で答えることはできない。そこで、このことの解明と、決定論的モデルの残りの支柱の解体に向けて、無限分析の説発見以降のモナドロジーの体系における個性の問題を次にみてみよう。

### 3. モナドロジー

無限分析の説は、決定論的モデルの支柱の内、論理的側面である内在説

の問題に根差したもの（偶然的命題の証明及び主語概念の集合的構造）を標的としたものであった。残された課題は、形而上学的側面である個性の問題に根差したものとなる。問題は、概念の領域から存在の領域へと移行せねばならない。個性の問題とは、完足概念が個体的実体の個性及び通時的同一性の原理として要請されたということに基づいていた。それは、自と他を区別する原理として完足的であらねばならず、諸状態の継起的变化を越えた同一性を保証する原理として、可能性の見地におけるアプリアリな原理であらねばならなかったのである。そこでもし、神の悟性の内にある完足概念に言及せずに、個体的実体の個性及び同一性を保証し得るならば、そのような役割を担うものとして要請された完足概念は不要のものとなり、個性の問題に基づく決定論的モデルの支柱も無意味なものとなるだろう。従って、ここでの課題は、現実の内に、個性及び通時的同一性の原理を見いだすことにある。

(a) 現実性の見地（決定論的モデルにおける）

確かに、決定論的モデルのテキストである「形而上学叙説」、及びアルノー宛書簡においても、「現実の状態において (*dans l'état actuel*)」(G. 2/41) という視点は存在している。「そこで、事物の連関をよく考えれば、アレクサンデルの魂の内 (*dans l'ame*) には、彼に起こったあらゆることの名残り (*restes*) や、これから起こるであろうあらゆることの子徴 (*marques*) のみならず、宇宙において起こるあらゆることの痕跡 (*traces*) さえもが常に存していると言い得る」(DM. 8, cf. G. 2/39, 126)。そうすると、個性の原理は、神の悟性の内にある概念に求めずとも、実体の内にある痕跡や子徴がアポステリオリな仕方でも保証してくれそうである。また一方、同一性についても、私は私であるという意識、「私の内的経験」(G. 2/43) がアポステリオリにそれを保証してくれるように思われる。そ

して、我々は、自身の精神の内にある過去の痕跡や未来の予徴を見たところで、例えば、自分が今後、旅行をするか否かを確実には知らない。即ち、現実の状態にあっては、未来は「未決定」(G. 2/45)であるように思われる。しかし一方、旅行をしようとしまいと私は私であるということについては確実であると思っている。一見すると、アポステリオリには、未来の出来事の偶然性と個体の同一性は両立し得るかに見えるのである。しかし、これは、「人が、各自で自分の個体概念について、特に持っている混雑な経験に訴えている限り」(G. 2/46)での話である。内的経験に基づく同一性は、「アプリオリな理由」(G. 2/43)を欠いている限り「先入見」(G. 2/45)であるとされ得るし、未来が未決定であるのも「混雑な経験」(G. 2/45, 46, 53)にのみ頼って、判明に個体概念を認識し得ない我々の認識の不全さに依るものに他ならない。一方には、神の視点、可能性の見地、アプリオリな、「判明な概念乃至認識」(G. 2/45)があり、他方には、我々の視点、アポステリオリな、「歴史に依る」(DM. 8)混雑な経験、先入見があるのである。個体の個性及び同一性の原理を判明に認識し得る程に、我々の認識能力が十全であるならば、そのとき、混雑なもの、未決定なもの、痕跡、予徴は消失し、完足的に決定された個体概念が与えられ、予言者になることは、幾何学者になるのと同じくらい容易なこととなるであろう (cf. G. 2/45, 53)。

それ故、「形而上学叙説」及びアルノー宛書簡に基づいて、現実の内に個体の個性及び同一性の原理を見い出そうとの試みは達成されない。ここでの現実性の見地は、混雑で不完全な可能性の見地にすぎず、アポステリオリなものの独自の領域を確立し得ずに可能性の見地へと取り込まれてしまうのである。

(b) 現実性の見地 (モノドロジーにおける)

「形而上学叙説」及びアルノー宛書簡において、個体的実体の本性とは、完足概念を持つことであった (cf. DM. 8, G. 2/41)。実体は、自身のあらゆる述語を所有し、他のものの述語とはなり得ない究極の主語として性格づけられていたのである (cf. *ibid.*)。しかし、1694年には、実体の概念と力の概念の統一が明らかにされ、(cf. G. 4/468-470)、その翌年には、実体とは、自発的に全宇宙を表象する精神であることが明確にされ、ライプニッツの体系がほぼ完成された姿でみられるようになる (cf. G. 4/471-477, 477-487)。ここに来て、以前にみられた主語という実体の論理学的規定と精神という実体の形而上学的規定との間の動揺に決着がつけられ<sup>(註6)</sup>、本来的には概念の、論理学の領域である可能性の見地に対して、理実性<sup>(註7)</sup>の見地が、実体の、存在の領域として独立した地位を確保したのだと言い得る。個体と出来事の関係は、もはや、第一義的には、表象する精神と表象、実体とその推移的状態との関係であって、主語と述語の関係ではないのである。従って、ライプニッツの完成された体系、モノドロジーにあっては、個体の個性性及び同一性の原理が、現実の内に見い出されるのは、むしろ当然と言える。

モノドロジーにおいて、個体 (精神) と出来事 (表象) との関係は、次のように言われる。「被造実体の本性は、或る一定の秩序に従って、連続的に変化することであり、この秩序は、その実体に起こる全ての状態を通じて、その実体を (この語を使ってよいなら) 自発的に導く。従って、全てを見る者は、実体の現在の状態において (*dans son estat present*)、過去と未来のあらゆる状態を見る」(G. 4/518)。ここでは、決定論的モデルにおいて切り捨てられた現実性<sup>(註8)</sup>の見地が復権し、個体概念に言及するという態度 (cf. DM. 13) は、実体の現在の状態に言及するという態度にと

って代わられている。過去の状態は、「印象 (impressions)」(G. 5/222) として、未来の状態は「予感 (présentimens)」(ibid.) として、実体の現在の状態の内に表象されているのである。

このような、モノドロジーにおける個体と出来事の関係に基づいて、現実の内に個体の個性及び通時的同一性を見出すのはさほど困難ではない。個体の通時的同一性は、実体の諸状態の変化に対する実体そのものの同一性であり、これは、系列に対するその法則 (cf. G. 2/263, 264), 派生的力に対する原始的力 (cf. G. 2/262) の超越性に比せられるが、これは、「変化するものの細部」(Mo. 12) に対する「変化の原理」(ibid.) の超越性であり、要するに、継起していく諸表象に対する表象主観の超越性に他ならない。諸項の系列をその法則が越えているように、実体はその推移の状態の変化を越えて同一であり持続的なのである。即ち、個体（表象主観）と出来事（諸表象）との間に明確な身分差を設けることによって、時間と共に変化する後者に対して前者がその同一性の原理たり得るのである。他方、先に、決定論的モデルにあっては、個体（主語）と出来事（述語集合）との間の身分差が明確ではなく、それ故、通時的同一性を保証するためには、いわば主語と述語とを共に脱時間的領域へ持っていく他なかったのである。

次に個性性であるが、決定論的モデルにおいては、内に全世界を含むことによって、一個体は他のあらゆる個体から区別され得たのであったが、モノドロジーにおいては、それでは十分ではないとされる。というのも、実体はどれも無限の宇宙を表出しているのであるから、同一の宇宙の内にある諸実体は、全て同一の宇宙を表出しており、従って、内に無限を含むというそのことだけで、同一の宇宙の内にある諸実体を相互に区別することはできないのである。それ故、モノドロジーにおいては、各実体は、何

を表象しているかによってではなく、いかに表象しているかによって区別され、内に無限を含むということによってではなく、無限を含むその仕方（la modification）によって区別される（cf. Mo. 60）。この、表象の仕方の差異が各実体を区別する原理であって、それは、表象の判明度の差である。諸モナドは「判明な表象の程度によって区別される」（Mo. 60）のである。そして、この表象作用の強度差を表象の仕方に即して展開すると、それは、時間的空間的遠近（les perspectives）乃至様々な視点（les differens points de veue）の相異として現れてくる（cf. Mo. 57）。各実体の区別は、同一の宇宙を、各々の視点から、各々の判明度で表象することによって区別されるのであって、たとえ、時間的空間的に遠く隔たった出来事とその遠さの故に、また、出来事の細部がその微小さの故に、混雑であったとしても、正にその判明度の差によって、各実体は、むしろ、その現実性の見地における表象の不完全性によってこそ可能となるのである。それ故、各実体は、「それ自身において、そしてその瞬間において」（PNG. 2）区別され得るのであって、個性性の原理として、神の悟性の内にある完足概念に言及する必要はもはや無いのである<sup>(註7)</sup>。

このようにして、我々は、可能性の領域にある完足概念に言及することなしに、現実の内に、個体の個性性及び同一性の原理を見出し得た。精神としての実体という実体規定の明確化が成したのは、手短かに言って、それら原理を神の悟性から実体の内へともたらしたということ、それら原理の内在化であった。しかし、この事態は、単に完足概念の内在化としてのみ理解されてはならない。述語が完足概念の内にある仕方と世界がモナドの内にある仕方とは、全く異質なものである。前者では、述語は、時制の区別なく、「一度に」、どの述語も同じ身分で含まれてあるのに対し、「襲」（Mo. 62, PNG. 13）乃至「細部」（Mo. 12, 60）として、モナ

ドの「奥底」(G. 4/475, 484)に折りたたまれている世界は、時間の経過によってのみ展開するのである (cf. Mo. 61, PNG. 13)。そこには、時制の区別があり、空間的遠近がある。過去や未来や遠くのものどもは、「今」「ここ」という現実の内にこそ表象されているのであり、現実を離れては何ものでもない。「現在は未来を孕み、未来は過去の内に続まれ、遠いものは近いものの中に出出されている」(PNG. 13)のである。モナドは、確かに全宇宙の全歴史を表象しているのであるが、それは、あくまで現実という視点から、なのであって、現実という留め金のない、可能性の見地における完足概念と述語の関係とは全く異なる。モナドの「種別化と多様性 (la specification et la variété)」(Mo. 12)はこの現実によってこそ得られるのである。

さて、ここまで来て初めて、我々は、先に無限分析の説の残した問い、主語は述語集合以上の何ものであり、いかにしてそれに先立つのかとの問いに答え得る。即ち、実体は、表象作用の主体として、全表象系列の総和以上のものであり、且つそれに先立つのである。つまり、実体は、精神であることによって初めて、出来事を卓越的に (*eminenter*) 含むことができる。

本論は、神の悟性の内にある、単純な述語の離散的集合としての完足概念に基づく決定論的モデルから出発した。この決定論的モデルは、二つの問題の内包する四つの支柱から構成されていた。内在説の問題にあっては、述語の主語への内在の仕方は、アプリオリに証明可能な仕方であり、主語は、単純な述語の集合であった。他方、個性の問題にあっては、個体の個性及び同一性は、完足的で脱時間的な個体概念にのみ求められるのであった。後者に従えば、個体の個性は、その個体概念にのみ求めら

れるのであるが、前者によれば、その個体概念とその含む述語との関係は必然的なのである。それ故、或る個体概念が他ならぬその個体である限り、その個体に起こる出来事は、必然的に起こらざるを得ない。このように、四つの支柱は互いに交差し、二つの問題は相互に補完しあいながら、決定論的モデルという一つのディレンマを構成していたのであった。このディレンマとは、端的に言って、個体の個性とその個体に起こる出来事の偶然性の非両立という事態である。

しかし、1689年頃には完成していたと思われる無限分析の説を考慮した上は、内在説の内包する二つの支柱は、共に否定されざるを得ず、従って、内在説の問題そのものが、誤った前提の上にたった擬似問題だったことがわかる。無限分析の説に従うならば、主語が内に含むのは、どこまでも分析可能な出来事の連続的系列であった。従って、偶然的命題は、証明不可能であるし、また、主語の構成要素となる単純な述語など存在しないのである。主語は述語の集合ではないし、偶然的命題においては述語は潜在的な仕方でのみ主語に内在する。このように、内在説の問題の前提そのものが否定される以上、もはや、主語と述語の関係の内的であることは、その関係の必然的であるということだという内在説の結論もまた否定されざるを得ないのである。

また、1694年頃から明らかになった実体概念に基づくならば、個体の個性及び同一性の原理を神の悟性の内にある個体概念に求める必要は、もはやないのであった。両原理は、共に、現実の現在の内に、実体の内に見出し得るのである。それ故、個性性の問題の依拠していた、個性性の原理としての完足的概念なるものは不要であるし、個性性と個体概念の連関という問題の前提そのものが消失してしまうのである。

従って、二つの問題は、共に、四つの支柱という問いとしての成立根拠

を失い、問題であることをやめてしまうのであり、それ故にまた、それら両問題が相まって一つのディレンマを構成するということが不可能になる。一方では、主語と述語の関係の必然的であることが否定され、他方では、個性の原理と個体概念との関係が断たれた今、個体の個性の問題とそれに起こる出来事の偶然性の問題は、決定論的モデルに見られたような連関を持ってはいないのである。個性と必然性の内的連関を前提とした、個性と偶然性の非両立というディレンマは、個性と必然性の無関係であることが露呈することによって、その根拠のなさがあらわになるのである。

ライブニッツの完足的概念という考えからは、決定論が導出されるのではないかという、従来から根強くある疑問はしかし、全く理由のないものとも言えなかった。先に見たように、自身の見解が決定論に近づいていたことは、幾多の解釈を待たずともなくライブニッツ自身の認めていたところであった。しかし、そのような解釈が可能なのは、1686年頃までのテキストにのみ基づいた場合である。それまでのライブニッツは、主語と述語の関係の内的であることは必然的であることを意味しないと明言しながらも、それがいかにしてであるのかを十分に説明し得なかったし、主語が述語集合以上の何ものであり、いかにして述語に先行し得るのかを明言していなかったのである。そして、これは、一つには、いまだ実体概念が完成の域に達していなかったことに由来すると思われる。実体の本性を個性、即ち個体概念を持つことに求め (cf. DM. 8, G. 2/41)、個体概念の個性性をその完足性に求める (cf. G. 2/38-39, 45-46) という仕方では、個体の個性の問題とその個体に起こる出来事の偶然性の問題が完足的概念において出会い、衝突するのも無理のないことなのである。しかし、モナドの概念が確立し、その本性が、不可分性及び作用性に求められて以降

は (cf. Mo. 1, PNG. 1), 個性性は、それらモナドの本性からの一掃結であり、出来事の偶然性乃至必然性の問題とは直接会おうこともないのである。

それ故、決定論的モデルは、1686年以前のライプニッツのテキストの一部に依拠して構成されたものであり、1694年以降のモナドロジーを正確に反映するものではないのである。

### 註

引用文中の仏語は、テキストのままとし、特に modernize はしなかった。

- (1) それ故、必然的真理と偶然的真理の差異は、述語の主語への内在の仕方にごそ求められねばならぬはずである。この差異については次節で扱う。
- (2) このような個体概念に対し、三角形や人間といった抽象的、種的概念は、有限個の述語で定義可能な非完足的な概念である。
- (3) このことは、より一般的に次のように言われる。「もし或る人の生涯において、あるいは、さらに、この宇宙全体において、或ることが実際とは違った行き方をしたとすると、その人は他の人になるか、もしくは、この宇宙は、神の選んだはずの他の可能的宇宙になると我々が言っても、さしきわりはないのであろう」(G. 2/53)。主語と述語の関係が本質的である以上、一述語の入れ替えは、個体の入れ替えを意味し、そして、一個体が全世界を内に含む以上、個体の入れ替えは世界の入れ替えを意味する。即ち、出来事の他であることは、世界の他であることであり、出来事の偶然性は、世界の存在の偶然性に他ならないのである。

以上のことを認めた上で、なお、ペテロがキリストを否認することの偶然性を示し得るとしたら、それは、ペテロの存在の偶然性を示すという仕方ではなかろう。キリストを否認するという以外、ほとんど全ての述語をペテロと共有する可能的ペテロ達という概念は、それ自体内に矛盾を含まず可能である。そのような可能的ペテロ達を現実のペテロの背景に置いてペテロの存在の偶然性を考えることは、ひとまず可能であろう。しかし、これは、他ならぬあの現実のペテロがキリストを是認する可能性を示すものでは全くない。キリストの否認は、現実のペテロの個性の一部であり、キリストを是認する可能的ペテロは、現実のペテロとは別の可能的世界に住む別の個体である。他の個体も実現し得るといふ個体の存在

の偶然性は、結局、他の世界も実現し得たという世界の存在の偶然性であり、この世界の内の、あのペテロの述語の他である可能性としての偶然性には何ら光を投げかけてくれるものではない。我々が求めているのは、他ならぬあの現実のペテロがキリストを是認し得たという可能性なのであって、現実のペテロとは別の、キリストを是認する可能的ペテロの実現可能性なのではない。

- (4) それ故、神であろうと分析の終極を見ることはできない。というのもそもそも終極というものが無いのだから (cf. FC. 182)。
- (5) ライブニッツは、しばしば、無限分析の説を説明する際、必然的真理と偶然的真理の差異を有理数と無理数、共約数と不可共約数の差異などに比した (cf. G. 7/309, Grua. 303, FC. 183-184)。このような比喩からは、両真理の差異の本質的であることは読みとりにくく、却って、いくらかでも両真理の差異を小さくすることができるかの印象を受ける。実際、こうした印象から、ライブニッツにとって、偶然的命題はつまるところ無限に複雑な必然的命題であり、潜在的同一命題であるとの解釈もなされてきた (cf. Louis Couturat; *La Logique de Leibniz*, p. 213 f., Bertrand Russell; *A critical exposition of the philosophy of Leibniz*. preface to the second edition, p. vii.)。そして、このような理解に基づいている限り、両真理の本質的差異は覆われ、無限分析の説が、決定論的モデルに対して無力となることは明らかである。しかし、このような解釈は、「一般的探求」への後退である。既に見た通り、両真理の程度化、連続化は、偶然的真理の証明可能性と偶然性の間の媒介、調停として生じたのであって、偶然的真理の証明が不可能であることが認められた上は、不必要であり、また両真理の本質的差異が認められた上は、不合理でさえある。「一般的探求」を無限分析の説の基本的テキストとする事には、問題があるのである。
- (6) このような動揺の内では、例えば「アルキメデスが自分の墓の上に置かせた球」(G. 2/39) は、一方では、individuel な主語となり得るが故に実体であるとされ (cf. *ibid.*)、他方では、indivisible な精神ではない故に実体ではないとされる (G, 2/96-98, 118-119) という困難を避け得なかった (cf. 拙論「ライブニッツによる物的実体の一性について」学習院大学文学部研究年報 37, 平成二年度)。
- (7) それ故、それ故、モナドロジーにおける、個体の完足的概念の消失という事態は、それがアルノーによって批判されたから、といった対外的要因に

よってのみ説明されるべきではなく、むしろ、ライブニッツ哲学における実体概念の深化発展の帰結として理解されるべきであろう (本論 3, (b) 参照)。ちなみに、この深化発展の結果、「モナドロジー」においては、“個体”、“個体的”、“個体性”、“個体化”といった語が一度も使用されていないという事実は、「形而上学叙説」におけるこれらの語の使用 (計 12 回) と比べて、両著作の間の或る断絶を語るものとして注意されてよい。

テキストとその略記号

- C. = *Opuscules et fragments inédits de Leibniz.*  
ed. Louis Couturat, Olms, repr. 1965, (C. 頁数)
- GC. = *Nouvelles lettres et opuscules inédits de Leibniz.*  
ed. Louis Alexandre Foucher de Careil, Olms, repr. 1978. (FC. 頁数)
- G. = *Die Philosophischen Schriften von G.W. Leibniz.*  
ed. C.I. Gerhardt, 7 vols., Olms, repr. 1962. (G. 巻数/頁数)
- Grua. = *G.W. Leibniz : Textes inédits d'après les manuscrits de la Bibliothèque provinciale de Hanovre.*  
ed. Gaston Grua, 2 vols., P.U.F., repr. 1948. (Grua. 頁数)
- DM. = *Discours de métaphysique.* (G. 4/427-463) (DM. 節番号)
- GI. = *Generales Inquisitiones de Analyti Notionum et Veritatum.* (C. 357-399) (GI. 節番号)
- Mo. = *Monadologie.* (G. 6/607-623) (Mo. 節番号)
- PNG. = *Principes de la nature et de la grâce.* (G. 6/598-606) (PNG. 節番号)

## An Individual and Events.

—LEIBNIZ on Complete Concepts.

The necessitarian model based on complete concepts of individuals has four chief theses. (1) A contingent proposition whose subject is a complete concept of an individual has an a priori proof. (2) A complete concept is a set of simple predicates. (3) A complete concept of an individual includes every event that has happened, is happening or will happen to him. (4) Complete concepts are in God's mind, timelessly.

According to the doctrine of infinite analysis, a subject of a contingent truth includes not a discrete set of simple predicates but a series of events that is continuous and infinitely analyzable (2). And since what is infinitely analyzable is not demonstrable, a contingent truth cannot be proved, although it has a sufficient reason for it (1). For that reason, in contingent propositions, a subject includes its predicates only *virtuellement*.

According to the monadology, a substance is not what has a complete concept, but a soul that perceives. So it is a percipient subject, not a logical subject, that includes events *eminenter* (3). And we can find individuality and identity of individuals in their actions of perception without referring to complete concepts, hence, complete concepts that have the role of the principle of individuality and identity are now needless and excessive (4).

Therefore, as an individual includes events *eminenter* and events are envelopped in an individual *virtuellement*, an event can be another while an individual maintains its individuality and identity.

(学習院大学人文科学研究科博士後期課程, 哲学専攻)